

第11回せんがわ劇場演劇コンクール講評

～ほろびて『あるこくはく』～



銀粉蝶

もっと形の整った戯曲も書ける作家だと思いますが、そこに向かわないところが大変いいと思います。俳優も謙虚に『演劇』に向かっていると感じました。

『演劇』とは何なのか？を自分に問いながら今のこの日々を生きて 演劇をしているなど感じられてはげまされました。

グランプリにふさわしいと思います。

多田淳之介

石の話は良かったと思います。個人的には、石の話だけでも良かった。四葉に関しては、家族との関係であったり、ちょっとわからなかったところもあります。

アフター・ディスカッションで時間軸を取りこみたかったというのを聞いて、とてもよくわかったんですが、「何故、石には見えてなくて」や「石と四葉が最後、見えていないなりに出会う」とかが、話を小さくしちゃった可能性もあるなと思いました。

暴力や差別というテーマは、ミャンマーの事や国内でも差別が横行していて具体的に結びつくことがいっぱいある中で朝鮮人の虐殺の話に限定されてしまったことももったいないなと思いました。差別や暴力を描きたいということが先にあって、それに合う事件を探してきたという感じがして、具体的な事件を

扱うことの「覚悟」というか、「昔あったことだから」にしてはセンシティブな題材ではあるので、特に加害者の立場にある事件を取り上げて何を表現するかはもっと慎重でも良いと思います。

題材選びや台本の運びも多少感じましたが、それを凌駕する石という圧倒的なモチーフは、グランプリに相応しいと思いました。市民審査員の方の質問でも、ベケットや別役さんの話も出ましたが、さらに一步踏み込んだ不条理というか、石は差別しても蹴っても良い存在ですからね。差別が生まれる時、差別する側に罪悪感はないということがとても鮮明でした。

受賞公演に向けて、アフター・ディスカッションで伺った、今回書きたかったけど書かなかった題材や森友学園問題とか見たいなと思いました。日本国内だと社会的な題材を取り上げることに對する偏見のようなものがまだまだあるなと思いますが、日本以外にそんな国もありませんし、そもそも演劇や芸術は社会の 이슈を取り上げて共有し様々な議論を生むものなので、芸術の力を信じてどんどんやってほしいなと期待しています。



西尾佳織

(アフター・ディスカッションで直接お話ししたかったのですが)「石」というアイデアがとてもいいと思いました。関東大震災と直線的に結び付けたことがもったいないと思っています。上演台本の差し替えもあったので、おそらく稽古場でも、登場人物の「四葉」という存在をどうするかとか、差別や暴力の問題を具体的な事件とどのぐらいの具体性で結び付けるかということは問題になっていたんだろうと思いますが、関東大震災と直接結び付けてしまったことで、もう結論がヒューマニズムになるしかなくなってしまったと思うのです。つくった人たちと同じ考え方の人たちにはこの作品が刺さると思うのです。

が、例えば在日コリアンに対して、今、差別的に思っている人たちがこの作品を見て、果たして何か変容が起こるのか？ 「石」という設定であり得たはずの問いかけの可能性が、かなり限定されてしまったように思います。そこがずっと引っかかっています。

関東大震災における朝鮮人虐殺を扱うというのはひとつの態度、もしくは覚悟がないとできないことで、そこに私も打たれました。ただ、その態度を持った上で、劇作上はそこを外すこともあり得たんじゃないでしょうか。「四葉」の存在が浮いていて整合性が取り切れていないことも、気になりました。

それから、モノローグが良くなかったと思います。細川さんの作品を沢山存じ上げているわけではないのですが、すごく書ける方なんだと思ったんです。それなのに、あんなに説明的で、場面や設定を処理するためのようなモノローグが出てきてしまって、もったいない！と思いました。俳優さんたちが大変達者なので観ていられたのですが、作品全体として見つめようとしている射程に可能性と深度があると思った分、そこが本当にもったいなかったです。

アフター・ディスカッションで、不条理劇についての言及が市民審査員の方から出たのは私も納得でした。あの「石」の不条理さでそのまま行った方が、もっと強い加害性や強烈なところまで扱えて、それがフィクションの良さのように思います。

……と色々言いましたが、全体の中では群を抜いてよかったです。演劇を通して人に何かを投げかけようとする意志とクオリティが両方ありました。

ムーチョヨ村松

(何も言う事がないくらい) ととてもクオリティの高い作品だったと思いました。不条理劇、ナンセンスコメディに関して僕はそんなに深く理解できていませんが、1つに集団の擬人化とか個人の感覚だと絶対選択されないであろう言動や発言、行動が集団化するとあり得ない選択肢をする。そのある集団を擬人化して俳優やキャラクターにその役割を担わせると、とても不条理な状況が起きていくのだと感じました。もちろん、設定上”石“というのはあり得ない、という不条理さもあると思うのですが、それぞれのキャラクターが持つ役割の中の不条理さや集団の持つ不条理さを詰め込むという要素があったと思いました。一方で、観劇をするのに個人的には体感上(ぼわーとしたり、じわーとしたり、笑ったり、など)で感じる部分で、観たときに面白い、面白くないという感覚を僕は大切にしています。その時間が今回、すごく挑戦だったのは、”石”さん。おとうさんからは、怒り憤りが伝染して伝わってきて、そうすると、泣いてる人を見るという事が一番伝わる。”石”さんが泣いているということに、果たして人間ではないモノに感情移入できるか。それは、なかなか難しいものがあって、単純に石だからなのか、後ろを向いているからなのか。「なんで後ろを向いているんだろう」と、審査会でも話題に上っていました。俳優さん自身も石なんだと、石なんだけど侮辱されて涙が止まらなくなっちゃったからと仰っていて、感情を見せようという意図があって後ろを向いていた。そこを含めて人間じゃないモノの涙に感情移入ができるか、自分が伝染して同情心が湧くのか、それは頭で考えることではなくて感覚として泣けるかというのが、実は今回この作品を観ている中で一番思ったことでした。

そこで、今度はセットの壁がないという事がどのような良さを発揮していくのかをすごく考えながら見ていました。ドアがないことや、セット上の演出なのか、コンクールでの仕込みの時間に対するアプローチなのか、普段からそのような舞台美術なのか…。壁がないことがよい効果になっていたかどうかという事だけは分からなかった。やはりここにもコロナの影響が出たのか！？コロナの影響をしっかりと受けて、

作品ごと変わるという感じがしました。とにかく面白かったです。また観たいです。

徳永京子

今回、複数の賞を受賞されましたが、専門審査員の方々の意見はほとんど割れませんでした。戯曲も俳優さん達の演技もレベルが高く、40分間ずっと緊張感が保たれながら、何段階か変化していく展開に、観ているこちらの集中力もギアが入っていくという理想の空気を醸造できていたと思います。

アフター・ディスカッションでは「最後に石を関東大震災時の朝鮮人虐殺事件と結び付けたのは蛇足では」という意見が聞かれました。でも私は、父親が石に向かって言った「君はただの石ころだ」というせりふから、朝鮮人への差別用語である「ちゃんころ」を想起して、「ああ、これは差別全体の話ではあるけれど、朝鮮人の話になっていくんだな」と予感したので、劇作家がただの思い付きで両者を結び付けたわけではないと思いましたし、「石」という言葉を何度も使う父親に、「石ころ」は一度しか言わせなかった点で、やはり意志ある選択だったと感じます。また、不条理劇の構造を借りて着地点をはっきりさせないままのほうが（伝えたいこと、伝えたい相手の）対象が広くなるという考えが理解できる一方で、私自身が、具体的な事件や出来事にフォーカスされないと我が事と感じられない怠慢な人間なので、石で殴り殺された女性の体験が語られる構成は悪いとは思いませんでした。

その上で、難民問題や外国人労働者問題にも繋がっている作品だと感じ、また、四葉おばさんが朝鮮人ということは、父親にもその血が流れているわけで、差別される人間がいつも簡単に差別する側に回る、根の深い問題の提示がなされたことにも感心しました。



撮影：青二才晃